

プラトン哲学における神の位置づけ

齊藤 安潔

1 序

「われわれ人間にとっては、万物の尺度は、なににもまして神であり、その方が、人びとの言うように、誰か人間が尺度であるとするよりも、はるかに妥当なことなのである」(『法律』716c)という言葉からも明らかなように、プラトンの哲学において神は非常に重要な役割を果たす存在である。ソクラテスが自らの哲学的探求を神への奉仕と考えたように(『弁明』23b)、プラトンもまた哲学を神との関係の内に捉え、その目的を「できるだけ神に似ること (homoiōsis theoi)」(『テアイテトス』176b)と表現している。

しかし、一口に神といっても、プラトンは神をどのような存在として考えていたのだろうか？ 少なくとも、当時の一般的な神々に対するイメージとはまったく異なったものであったのは間違いない。というのも、プラトンは『国家』などでホメロスやヘシオドスら詩人の形作っていた、古代ギリシアにおける一般的な神々のイメージを厳しく批判しているからである。プラトンの神々は叙事詩に描かれていたように互いに争ったり、人間に悪意を向けたりすることはない、まったく善なる正しい存在として考えられている。さらに、『ティマイオス』においてはアイデアを元に世界を形作るデミウルゴスという神についても語られているが、これは伝統的な神々とはまったく異質な存在だと言えるだろう。

その一方で、プラトンは伝統的な形の神々、つまり人々から奉納を捧げられ、神殿で崇拝を受けるオリュンポスの神々の存在もはっきりと認めている。それゆえ、こうしたいわば二種類の神々をどう解釈するのかということが研究者にとって問題となってきた。たとえば、Feibleman は、プラトンはいわば二つの宗教を持っていたのであり、それらを明確に区別しなければならぬと主張した⁽¹⁾、Dodds は古代ギリシアの神話で語られたり儀礼で崇拝されたりする神々のことをプラトンが真剣に考えていたとは思えないとした⁽²⁾。しかし、そのようにプラトンが神について二種類の概念を使い分けていたと考えると、冒頭で述べたような万物の尺度や、「神に似る」という哲学の

目標としての神をどこに据えればいいのかという問題が出てくるように思われる。また、プラトンにとっての神は哲学的活動において模範となる神々であって、伝統的な神々は哲学者以外の人々を誤魔化すための方便に過ぎないのだと言い切ってしまうことにも問題があるだろう。

本稿においてはこうしたプラトンにおける神の問題を考察するため、対話篇において神がいかなる存在として捉えられているのかということと、古代ギリシアの伝統的宗教においては神々がどのような存在であったのかを踏まえた上で、彼の哲学において神がどのように位置づけられているのかを考察したい。

2 神概念の考察

まず、プラトンにとっての神がいかなる存在であるかという点について、対話篇における記述を見ていくことにする。神についてのプラトンの考えがはっきりと示されているのは、やはり『国家』2巻の詩人批判の箇所であろう。そこでは、「神は善き者である」という前提から始まり、「善いものであれば害を与えることはなく、悪いものの原因ではなく、むしろその逆である」とされ、「神が善い者である以上はあらゆるものの原因ではなく、善いことについては神以外の何者をも原因とみなすべきではない」という結論が導き出されている(379b-c)。こうした「善き者、善のみの原因」としての神は、自分は永遠の幸福を享受する一方で、人間には禍福ない交ぜになった運命を与えるというホメロスにおける神のイメージとは明らかに異なっている⁽³⁾。この「善き神」という前提がどこから出てきたのかについてプラトンは何も語ってはいないものの、彼の師であるソクラテスの考えを受け継いだのだということはほぼ間違いないだろう⁽⁴⁾。というのも、ソクラテスにとって神こそが真の知者であり、彼の主知主義からすれば、知者であるならば善き者に違いないからである(『弁明』23a)。そして、この「神は善き者である」という前提から、ホメロスやヘシオドスの語る伝統的な神々のイメージも批判されることとなる。クロノスが父であるウラノスを去勢し、またそのクロノス自身も息子であるゼウスに打ち倒されるという神話は『国家』以外にも『エウテュブロン』や『法律』などで引き合いに出されて批判されているし、他にも『イリアス』で描かれているような、ヘラがゼウスを騙して眠らせるとか、神々が互いに策略をめぐらしたり相争ったりするといったことは、すべて受け入れられないものと

されている（『国家』378a-e）。

また、『法律』10巻の無神論者たちへの論駁も、プラトンにとって神がいかなる存在であるかを明らかにするものとしてよく引用される箇所である。そこでは神々に対して不敬な振る舞いをする者は「第一に神々が存在すると考えてはいないか、第二に神々は存在するけれども人間のことを気づかなくてはくれないと考えているか、第三に神々は犠牲や祈願によって心を動かされるから機嫌をとりやすいものと考えているか」のいずれかだとして、神々について誤った考えを抱いているとされる（885b）。そうした無神論、ないしそれに類する考えを論駁するために、アテナイからの客人は高度に哲学的な議論を展開する。まず、神々が存在しないと考える無神論に対しては、この宇宙に存在する運動変化の種類が数え上げられ、その中でも「自分で自分を動かす動」こそがもっとも古く、力強いものとされる。というのも、他のものに動かされるだけのものは運動の始原とはなりえず、自ら動くことのできるものこそがそれに当たるからである。そして、自ら動くものは生きていと呼ばれるし、魂の宿っているものも生きていと呼ばれるのだから、魂こそが自ら動くことのできる動だということになる。かくして、この世界全体は魂の引き起こす運動によって動かされているのだが、そうした運動には善いものと悪いものがある。しかし、この世界、特に天体の運行が極めて秩序正しいものであることから、それらを動かしているのは知性を備えた善き魂だと考えねばならない。そして、そのような魂をこそ神と呼ぶのである（893b-899b）。さらに、神が知性を備えた善き存在であるということから、残り二つの神々についての不敬な考えも必然的に論駁されることになる。知性と徳を備えた神々が、自らが管理する対象であり、彼らの所有物であるところの人間を配慮しないということは能力的にも性格的にもありえない。むしろ、神々は世界の全体をもっとも善い状態にするために配慮をしているのであって、ただ個々の人間をひいきしたりはしないだけであるし、正と不正の報いは生きている間にやっつこないとしても、死後にやっつくることになるだろう（901d-905d）⁽⁹⁾。また、知性と正義を備えた優れた守護者である神々が不正な贈り物によって心を動かされることも当然ありえないということになる（905e-907c）。

最後に、『ティマイオス』における製作者（デミウルゴス）としての神についても述べておこう。感覚しうるものとしてのこの世界は、感覚しうるもの（つまり物体）であるがゆえに、常にあるもの、永遠なものではなく、どこかで生成したはずである。

世界が生成したものであるならば生成した原因が必要となる。その原因となる神がどのような存在かは明らかではないものの、ともかく製作者としての神がいることは間違いなく、その神は永遠不変の実在であるアイデアをモデルとしてこの世界を作り上げたのだと主張される (28b-29a)。そして、製作者としての神はもっとも優れた者である自らに似せてこの世界を一つの生き物として創造していくのだが、その世界の中には目に見える肉体を持った神々としての天体も創造されることになる。そうした神々は魂と肉体とが結び付けられて作られたものではあるが、その結びつきが調和の取れた、きわめて強固なものであるため、不死なる存在である。そして、この宇宙をより完全なものとするために、これらの作られた神々が製作者である神の後を受けて、人間とその他の生き物たちを作り上げる様子が詳細に語られることになる (40d-41d)。

いくつかの対話篇における以上のような記述から、プラトンにとって神とはどういう存在であったかを、次のようにまとめることができるだろう。すなわち、神とは知性を備えた善き魂であり、この世界のすべてを配慮し、秩序付けている存在である。アイデアが世界のモデルとしての原因である一方、神々はそれを元にして世界を形作っているという意味での原因なのだと言うこともできるだろう⁽⁶⁾。また、神は複数存在し、その中には肉体を持つものも含まれている⁽⁷⁾。たとえば天体がそうであるし、他にも『パイドロス』246c-d では神々は魂と肉体を持った不死なる生き物として、また『法律』904a では「法律によって認められている神々」も魂と肉体が結合した存在として語られている。こうした神々是对話篇においてゼウスやアポロンといった固有名で呼ばれることもなければ、何か個別の性格を持つものとして描かれることもない。そこには伝統的なギリシアの神々の性格は見られず、プラトンはあたかも理性宗教とでも言うべきものを提示しているようにも思える。しかし、プラトン自身ホメロスやヘシオドスといった詩人たちは批判するものの、伝統的な宗教の要素や神々を否定することはしていないことに注意しなければならない。次節においては、プラトンがそうした伝統的な宗教の形で現れる神々をどのように扱っているかを考察する。

3 伝統的な神々の扱い

プラトンの対話篇には数多く神々の名前が出てくるが、中でもやはり注目すべ

きなのは『法律』だろう。というのも、そこでは伝統的宗教のやり方に沿った形で神々を崇拜するように定められているからである。たとえば、国を作るにあたっては、立法者は神々と神殿について、「デルポイやドドネやアンモンの神託が、あるいは古い言い伝えが、何らかの仕方によって人々に信じ込ませたもの」を変えてはならないとされる。なぜなら、そうした言い伝えが元になって祭儀が定められ、神殿が建立されたからである (738b-e)。さらに、デルポイの神託によって国家のものとして祭礼を定め、一年 365 日の内一日たりとも欠けることなく、国家と国民のために役人が神々へと犠牲を捧げねばならない。そして、それに加えて国を 12 の部族に分ける際に名を借りた 12 柱の神々に対してそれぞれ月を割り当て、12 の祭礼を作るとされている (828a-d)。この他にも『法律』には神事にかかわる事柄が細かに規定されているし、オリンピア競技祭やイストミア競技祭といった汎ギリシア的な祭礼に国として参加するとされている点からしても(950e)、『法律』の理想国は宗教という点においては当時の他のギリシアのポリスとほとんど変わらないと言ってよいだろう。また、国家における宗教の問題（新たに祭礼を創設したり新しく神殿を建てたりすることの是非、祭礼や儀礼の執り行い方など）についてデルポイの判断を仰ぐという点については、『国家』でも同じことが言われている (427b-c)。このように宗教に関してデルポイの神託を頼るのは古代ギリシアではごく当然のことであった⁸⁾。

しかし、いかに『法律』における宗教の扱いが伝統的なものであったとしても、プラトンは無批判にそれらを受け入れているわけではない。『国家』における詩人批判からもわかるように、プラトンは神々についての伝統的な神話の多くを誤ったものとして退けている。それは『法律』においても同じことで、おそらくヘシオドスの『神統記』が念頭に置かれているのだろうが、「神々の誕生と、誕生してからのちの神々の相互の交渉のこと」についての話は少なくとも「親に仕えるとか親を敬うとかいう点では、わたしとしてはそれらの話をほめて、それは有益なものであるとも、また事実本当のことが語られているのだとも、けっして言いほしなまいらう」(886c)と言われている。また、その他にもおそらくヘルメスが詩人たちによって盗みの達人として語られていることを想定して、神々は詐欺や暴力行為を喜びほしなまいらう、そんなことをしたりもしないとも語られている (941b)。

このように一方で神々についての神話を手厳しく批判しつつ、他方でその神々を崇拜するように法律で定めるというプラトンの姿勢は、一見した所矛盾したものに思え

るかもしれない。しかし、古代ギリシア宗教においては神話と儀礼は確かに密接な関係を持っているものの同一のものではなかったことを考えれば、プラトンの態度はそれほど奇異なものではない。古代ギリシア宗教の中心はあくまで儀礼であって、そうした儀礼は特定の職能を持った神々と、その神々固有の聖域と分かちがたく結びついていた。たとえば、アテナイにおいてはアテナ・ポリアス（国家の）とかアテナ・ニケ（勝利の）、アテナ・ヒュギエイア（健康の）、アテナ・エルガネー（職人の）といった添え名を持つアテナが、それぞれ別の聖域で崇拝されていた。これらは皆同じアテナでありながら、別々の場所で、別々の恩恵を与えるものとして信仰されていたわけである⁹⁾。こうした実際の崇拝に対して、神々のイメージとでもいうものを形作っていたのが、ホメロスやヘシオドスといった詩人たちであった。たとえば、ホメロスにおいてゼウスは神々の王であり、「雲を集める」とか「雷鳴轟かす」といった、天空を統べる神としての側面が強調された添え名と共に呼ばれているし、ゼウスの妻であるヘラも「白き腕の」といった、優美な外面を思い起こさせる添え名が付けられている。しかしながら、前述のアテナの添え名と比較すればわかるように、ホメロスにおける添え名はあくまで神々への性格付けのために用いられている。つまり、詩人たちの描いた文学作品における神々は、直接の崇拝の対象ではなかったのである。もちろん、儀礼から神話へ、神話から儀礼へという相互のフィードバックは存在していたが、それでも両者は同一ではなかった。そのため、悲劇作品のように既存の神話に新たな解釈を加えることも盛んに行われたし、クセノパネスやエウリピデスのように、ホメロス風の神々に対して痛烈な批判をするような人々も数多くいた。そして、プラトンが『法律』において具体的に神々の名を挙げる場合、それはやはり「境界の神」ゼウスであるとか（842e）、職人の保護者としてのアテナとヘパイストス、戦争の神としてのアレスとアテナという仕方であって（920e）、実際の崇拝を念頭においていることは明らかである。それゆえ、プラトンが詩人を批判しつつ、伝統的な形で神々を受け入れていることは当時の感覚からすれば矛盾したことではなかったと言えるだろう¹⁰⁾。

また、こうした職能という観点から以外にも、プラトンが神々に個別の性格付けを認めていたと思われる箇所もある。『パイドロス』の翼ある馬車のミュートスにおいては、天界において神々が翼ある馬車を駆る様子が描かれているが、そこに登場する神々はゼウスを初めとしたオリンポスの神々である（246e-247a）。そして、神々に随行しようとする人間の魂もまた、自らが付き従っていた神々の性格に影響を受けるとされて

いる。たとえば、ゼウスに付き従っていた魂であれば、なにかゼウスに似た知を愛し、人の長たる性格を持った人を捜し求めるし、自らもそのような本性を実現できるように努める。その一方、アレスに付き従っていたものは、恋する相手から酷い仕打ちを受けたと思ひ込んだりする場合、殺気だって相手をわが身もろとも血祭りにささげることを辞さない性格になると語られている (252c-253c)。こうした記述はかなりの程度ホメロスやヘシオドスらのイメージを反映しており、プラトンがそうした要素を全く排除していたわけではないことを示しているように思われる。

4 哲学における神の役割

ここまでは対話篇におけるさまざまな記述を基に、いわば哲学と伝統という両面から、プラトンによって神がどのように捉えられているかを見てきた。それでは、結局のところ彼の哲学において神はいかなる役割を果たしているのだろうか？ それを明らかにする手がかりとなるのは、本稿の冒頭で示した「万物の尺度は神である」と「できるだけ神に似る」ことが必要だというフレーズである。そうすると、一体尺度とは何を意味するのか、そして神に似るとはどういうことなのかが問題となってくる。Sedleyによれば、神とは人にとって正義の基準であり、模範となる存在である⁽¹¹⁾。『テアイテトス』の当該箇所においては、神に似た人間というのは思慮をもって、人に対しては正しく、神に対しては敬虔な (*hosios*) 者となると語られている (176b)。Sedleyが指摘するように、敬虔というのは古代ギリシアにおいては正義と類比的な概念であった⁽¹²⁾。正義が人間相互における義務や適切な振る舞いを示す一方、敬虔は神々に対するそれを意味したからである。そして、プラトンにとって神とは知性を備えた善き者であるのだから、そうした存在に対して敬虔である（つまり適切な関係である）ということは、同時に正しい者であるということの意味する。なぜなら、「似たものは似たものに愛される」(『法律』716c) という言葉が示すように、神に愛される者となるためには、やはり神と同じように、正しさ、勇気、節制、知恵といった諸々の徳を備えていなければならないからである。プラトンにとって神とは、まさしく徳の「尺度」であり、同時に完璧な模範でもあると言えるだろう。

それでは、こうした尺度としての神と、『法律』や『国家』で認められている伝統的な神々とは、一体どのように関係するのだろうか。Morganはこの問題について、一方

は哲学的な、他方は非哲学的なものとして、異なったレベルの敬虔さを実現しているのだと主張する⁽¹³⁾。つまり、哲学的な素養のあるごく一部の者たちは、哲学的探求という形で神々へと奉仕し、『パイドン』や『パイドロス』といった対話篇で描かれているような、きわめて高いレベルでの敬虔さを達成することができる。また、ある者は、『法律』の第10巻に記されているような、神々の正しい姿を理解する程度までは達することができるかもしれない。さらに、その他の大部分の人々は、そうした事柄を理解できないにしても、法に従う生活を送ることで、それなりの敬虔さを実現することができる。これらが一体となって、理想のポリスにおける敬虔さというものを形作っているというのが Morgan の主張である。

この Morgan の指摘は『法律』のポリスにおける宗教の在り方についてのものだが、それに留まらず、崇拝の対象となる神々の在り方についてまで拡張することができるようにも思われる。つまり、異なったレベルの敬虔さは神々についての異なったレベルの理解に基づいているわけであるから、神々の姿というのもそのように異なったレベルで描かれうるのではないか、ということである。たとえば、仮に「人間の本質」というものを探究しようとするならば、個々の人間の特徴というものは捨象されていくはずである。ソクラテスの外見はシレノスに似ているとか、メノンはプライドが高いといったことは、「人間の本質」という観点からすれば不要だと言える。本質を問うソクラテスに対して個別的な事例を挙げ、否定されてアポリアに陥るというのはプラトンの初期対話篇によくあるパターンであり、そもそもプラトンの哲学における探求というのは個別性を捨象して普遍へ向かうという性質を持っているように思われる。

「人間の本質」をそのように探究すれば真の自己である「魂」に行き着くように、「神の本質」というものを考えるならば、それは「知性を伴った善き魂」というものになるのではないだろうか。しかし、神の本質がそういうものだからといって、個別性を伴った神々、つまりゼウスやアテナといった神々が、「神」ではないということにはならないだろう。それは、「人間の本質」が魂であるのと同時に、個々の人間、ソクラテスやテアイテスが人間であるのと同じである。

そのように考えるならば、哲学的な神々と伝統的な神々とは別々の存在ではなく、同じ存在を異なったレベルで認識しているのだということになる⁽¹⁴⁾。アイデアの世界により近い高度な認識で捉えるならば、神々は知性を伴った善き魂として認識される。だが、この感覚される世界のレベルにおいては、伝統的宗教で描かれるような、さま

ざまな特徴を伴った存在としてわれわれの眼に映るだろう。それゆえに、詩人たちのように神々について誤ったことを語る者も現れてくる。しかし、神は善き者であり他者を騙すようなことはしないのだから、そうした誤りを犯す責はすべて人間にあるのだと考えねばならない⁽¹⁵⁾。この世界に生きるわれわれが感覚的事物を否定して生きることができないように、社会的な側面も含め、伝統的な神々を完全に否定するのは困難であろう⁽¹⁶⁾。むしろ、感覚的事物を真実と取り違えないように気をつけねばならないのと同じく、そうした詩人たちの作り事を真実だと思い込まないことが大事なのだと考えられる。

5 神との隔たり

それでは、結局古代ギリシア宗教の神についての考えは、プラトンのそれとどのように異なっているのだろうか。そもそも、デルポイの「汝自身を知れ」という有名な格言が示すように、古代ギリシアにおいては伝統的に神々と人間の間には、埋められない溝があるとされていた。神々は不死で、永遠に幸福を享受する一方、人間は可死で、禍福ない交ぜになった生を送らねばならないからである。そして、こうした神と人との隔たりを埋めようとする試みとして、ピュタゴラス派やディオニュソス崇拝、オルペウス教といった秘儀宗教が現れてきたとされている。プラトンがピュタゴラス派から大きな影響を受けたのはよく指摘される点であり、彼の宗教観もやはりピュタゴラス派に類似した、神と人間との間の差を埋めようとする、つまりは神へと近づこうとするものだとして一般的には考えられている。たとえば、McPherran はソクラテスが不可知論に立って神々との隔たりを認識するという伝統的な立場に立っている一方、プラトンは魂の不死という観点からその隔たりを越えられると考えており、後者が前者から多くのものを引き継いでいるにもかかわらず、両者の間には大きな差異があるとしている⁽¹⁷⁾。

しかし、プラトンの思想をそのように伝統的な敬虔さから切り離して考える見解には、いくつか疑問を呈しうるように思われる。まず、仮にプラトンが神々と人間との隔たりを埋められると考えていたとして、それがどの程度のものなのかという問題があるだろう。確かに、哲学的探求によって知を得ることができれば、死後に「よりよいところ」とか「浄福者の島」へ行けるという記述はある。だが、そうした概念はオ

ルペウス教などの神秘宗教でなくとも、そもそもホメロスに見られるものである。ゼウスの娘婿であるメネラオスは、その義理の血縁関係ゆえに死すべき運命を逃れ、神々の下で幸福に暮らすと語られている。他にも、ヘラクレスを初めとして、英雄的な行為を成し遂げた者が、死後に神として祀られる例は多数ある。プラトンはこうした英雄的行為を哲学的探求に置き換えたのだとすれば、伝統的な敬虔さからそれほど乖離しているわけではないと考えることもできるだろう。

ただし、すでに述べたように、神々をどのような存在として捉えるかという点については、伝統的宗教とプラトンの間には大きな違いがある。伝統的宗教における神々は神話で表されているように互いに争う存在であり、基本的には自らの利害にのみ関心を持つ存在であった⁽¹⁸⁾。これに対して、プラトンにとって神々は知識を備えた善なる存在であって、善なる存在であるが故に互いに争ったりすることはないし、祈願や犠牲によって心を動かされたりもしないとされている。プラトン自身は神々への供犠を否定してはいないが、プラトンの考え方は供犠の有効性に疑問を投げかけるものであり、神々と人間の間の互酬性を取り持つものとしての供犠を中心として成り立っていた古代ギリシア宗教の根幹を揺るがしかねないものであったのは間違いない⁽¹⁹⁾。このように、伝統的宗教とプラトンの関係は緊張を孕んだ危ういものであったということは、プラトンと同じように神々は善なる存在であると確信していただろうソクラテスが不敬神の罪で死刑に処されたことから窺い知ることができる。そして、そうした緊張が「伝統的宗教」と「哲学的宗教」という二つの相容れない宗教的要素がプラトンの思想の中に存在しているという解釈を生み出す原因となってきたのだとも考えられるのである。

最後に、プラトンが人間の本性についてどの程度楽観的であったのかという問題について述べておこう。彼の最後の著作である『法律』には、「人間というものは多くは神の操り人形であって、ほんのわずかに真実にあずかるに過ぎない」(804b) という、むしろ悲観的な記述が存在している。これは晩年のプラトンが『パイドン』や『国家』において示されているような、人間は哲学によってイデアを認識できると考える「楽観論」から路線変更をしたからだとも考えることもできるかもしれない。しかし、『パイドン』において人間の魂が肉体と交わるならばすぐに感覚的なものによって酔わされてしまうとされていること、『パイドロス』の馬車のミュートスにおいては悠々と天界を往く神々と比べて人間は欲望の馬に引っ張られ、しまいには翼を失って墜落してし

まうとされていることを考えると、プラトンは人間の魂に神的な要素を認めつつも、やはりそこに完全な神とは異なる弱さを見ているように思える。そして、「できるだけ神に似る」という、プラトンが掲げた哲学の目的は Sedley が指摘するように一度達成すれば終わりというようなゴールではなく、常にそれを実現し続けなければならないものと考えべきだろう⁽²⁰⁾。つまり、神は常に変わらぬ基準、模範として存在しているが、われわれは神になることはできず、哲学的探求という神への奉仕を通じて、世界を善いものにするというその仕事を助けることで、できるだけ神に似るように努力し続けることしかできないのである。

注

- (1) James K. Faibleman, *Religious Platonism*, George Allen & Unwin Ltd.: London, 1959, pp. 67f.
- (2) E. R. Dodds, 'Plato and the irrational,' *Journal of Hellenic Studies* 65, 1945, p. 22.
- (3) 『国家』379d, 『イリアス』24. 525-533.
- (4) Mark L. McPherran, 'Platonic Religion', *A Companion to Plato*, ed. Hugh H. Benson, Blackwell, 2006, p. 248.
- (5) こうした神々の在り方は、『国家』(420b-c)において哲学者たる支配者が特定の階層ではなく国家全体を配慮するとされているのを思い起こさせる。
- (6) アリストテレスにおける形相因、作動因に対応するようなものだと考えることもできる。
- (7) デミウルゴスのような神が肉体を持つかどうかは定かではないが、Dombrowski はデミウルゴスの創造する世界が知性を伴う魂を備えた生き物とされていることから、世界靈魂としてのデミウルゴスに肉体としての世界が対応していると主張している。Cf. Daniel A. Dombrowski, *A Platonic Philosophy of Religion*, State University of New York Press: Albany, 2005, pp. 15-32.
- (8) Glenn Morrow, *Plato's Cretan City: A Historical Interpretation of the Laws*, Princeton UP: Princeton, 1960, pp. 405f.
- (9) Jon D. Mikalson, *Ancient Greek Religion*, Blackwell, 2005, pp. 33f.

- (10) McPherran, p. 249.
- (11) David Sedley, 'The Ideal of Godlikeness,' *Plato: 2 Ethics, politics, religion, and the soul*, Ed. G. Fine, 1999, p. 312.
- (12) Walter Burkert, *Greek Religion*, trans. John Raffan, Harvard UP, 1985, pp. 269f.
- (13) Michael L. Morgan, 'Plato and Greek Religion,' *The Cambridge Companion to Plato*, ed. Richard Kraut, Cambridge UP, 1992, pp. 241f.
- (14) Malcolm Schofield, *Plato Political Philosophy*, Oxford UP, 2006, p. 316.
- (15) 『国家』では神々は他者を騙すことはないと言われている。また、悪や誤りの責が人間にあるということもしばしば語られる。Cf. 『国家』617d-e, 『ティマイオス』42a-d.
- (16) 倫理的に問題がない限り、言われていることはそのまま受け取るというのがプラトンの基本的なスタンスだと考えられる。Cf. 『パイドロス』229d-e.
- (17) Mark L. McPherran, 『ソクラテスの宗教』、米沢茂・脇條靖弘訳、法政大学出版局、2006、pp. 351-366.
- (18) ジョン・D. マイケルソン、『古典期アテナイ民衆の宗教』、箕浦恵了訳、法政大学出版局、2004、p. 36。ただし、ロイド＝ジョーンズ（『ゼウスの正義』、眞方忠道・眞方陽子訳、岩波書店、1983）のように、伝統的宗教の神々にも倫理性が存在すると主張する立場もある。
- (19) Walter Burkert, *Creation of the Sacred*, Harvard UP, 1998, pp. 143f.
- (20) Sedley, p.319.